

# 研究ノート

## 道徳教材として的大河ドラマ「西郷どん」の人物像に関する研究 The study of essays on contents of moral education teaching materials by Takamori Saigou“SEGODON”in 2018 NHK period Taiga Drama series

田 中 卓 也

### 要約

西郷隆盛は、日本の歴史上の人物としても名を知られ、多くの人から人気を得ている。現在放映中である、NHK大河ドラマ「西郷どん」の主人公として抜擢され、お茶の間でも広く親しまれている。西郷はまた道徳教材としても活用されるべき人物であり、年長者が年少の者を指導・教育する「郷中教育」のなかで育ったのを起点に、多くの書を読み、多くの人々と出会うことで、「教育愛」、「人間愛」を育んだ。離島生活を通じてうまれた言辞の「敬天愛人」に見られるように、彼は神を信じ、他人には思いやりをもって接することを惜しまなかった。また道徳教育に通じるような信頼や克己心、自覚、勇気、協力の大切さなども彼の思想にも込められており、小学校（2018年より開始）、中学校（2019年より開始）における道徳の教科化が進む中で、教材として活用できるだけの人物像であることを明らかにした。

キーワード：西郷隆盛 道徳教育 敬天愛人 郷中教育 道徳の教科化

- I はじめに—本研究の目的と先行研究の検討—
- II 西郷隆盛という人物
- III 幼少期の西郷隆盛—「郷中教育」および「日新公いろはうた」を中心に—
- IV 島での生活と人間愛の醸成
- V 西郷の考えるリーダーとしての条件
- VI 「学習指導要領」における道徳の項目と西郷の道徳思想
- VII おわりに—西郷隆盛と道徳教育—

### I はじめに

#### —本研究の目的と先行研究の検討—

西郷隆盛は歴史で教えた人物のなかにも取り入れられるだけでなく、全国の小学校、中学校の道徳の教科書にも掲載されることが多いといわれる。また文部科学省における「道徳の教科化」が小学校では、2018年（平成30）年より、また中学校では、2019（平成31）年より、それぞれ義務付けられることになった。小学校で「偉人（歴史上の人物）の生き方に学ぶ」ことは実践しなければならない項目となっている。

本研究では、日本の近代化に貢献した西郷隆盛をとりあげる。西郷については、タイム

リーであるが、本年1月よりNHK大河ドラマ「西郷どん」の主人公として現在好評を博しており、滑稽かつシリアスな展開は、いままなお多くのお茶の間を温めているものと考えられよう。

さて、西郷隆盛に関する先行研究は、多くの蓄積が存在している。安藤優一郎『西郷隆盛の明治』（歴史新書、2017年）、磯田道史『素顔の西郷隆盛』（新潮新書、2018年3月）、一坂太郎『これだけは知っておきたい幕末・維新』（朝日新聞出版、2012年）、井上清『西郷隆盛』（中央公論社、1970年）、猪瀬直樹・磯田道史『明治維新で変わらなかった日本の核心』（PHP新書、2017年）、坂野潤治『西郷隆盛と明治維新』

(講談社現代新書、2013年)、松浦玲『勝海舟と西郷隆盛』(岩波新書、2011年)など多くは伝記として発行されている傾向がある。また本田実『「道徳の時間(中学校)」「偉人の生き方に学ぶ」—西郷隆盛の生き方をめぐって、人生のモデルを見つける試み—』(『星稜論苑』第42号、2014年)では、歴史上の偉人を素材として、人物の偉業はもちろんのこと、短所や挫折に光を当て、彼の生き方を中学生に考えさせることがねらいである。また西郷隆盛の偉業のみならず、短所や挫折などについて知り、西郷の生き方を考える土台を固めるために、道徳の時間において生徒同士で議論させている。西郷は、日本の歴史上の人物がたくさん存在するなかにおいて、生き方を学ぶための格好の材料であることを意味しているものと考えることができよう。しかしながら執筆者は、西郷の50年にわたる人生から、道徳教材として扱うことのできる内容について見出していくものであるため、先行研究とは視点を異にするものである。西南戦争で士族軍を率いて、明治政府に反抗する賊軍扱いされた西郷であるが、その西郷がなぜここまで、多くの人々の共感を得る人物になりえているのだろうか。そこには西郷の生き方や考え方が現代の子どもたちのためになるものとなっているからではないあだろうか。現在、放送されている「西郷どん」を見ながら、ますます西郷のファンが増えているようにも感じ取れる。いずれにせよ西郷は、時代を経ても、多くの人からこよなく愛される人物なのであろう。

本研究では、西郷隆盛の人物像に焦点を当て、彼が残した名言や行動、および業績等から、道徳教材としていかに活用することができるのか、考察・検討を試みるものである。なおその際には「西郷どん」で描かれている人物像を参考に論を進めていきたいと考えている。

## II 西郷隆盛という人物

西郷隆盛は、1827(文政9)年12月7日に薩摩国にて下級藩士であった父の吉兵衛、母ますの長男として誕生した。彼を含めて七人の

兄妹、叔父、叔母のいる大家族のなかで育った。三番目の弟の信吾は、のちに海軍大臣となった西郷従道のことである。また大山巖、川村純忠は彼の親戚にあたる。

幼少期からわんぱくな性格であり、体格も豊かなものであり、力持ちであったといわれる。青年時代には藩内で「御前相撲」が行われた際には、時の藩主島津斉彬を倒し、優勝するという経験をもつ。無礼を働いたということで西郷は、一時入牢となるも、やがて斉彬の赦免を受け、再び下級武士として復活することになった。以後西郷は斉彬の目に留まり、側近の「お庭番」に抜擢されることになった。斉彬が急死すると、西郷は失脚し、奄美大島に流刑となった。その後復活を果たすものの、斉彬の異母弟であった島津久光と折り合いが合わず、再度沖永良部島に配流となった。西郷は長い島生活を余儀なくされるも、家老の小松帯刀、親友であった大久保利通らの働きかけにより、再度薩摩に戻るようになった。1864(元治元)年に京都で勃発した「禁門の変」(蛤御門の変)以降の活躍は目ざましいものがあり、1866(慶応元)年に盟友坂本龍馬仲立ちで行われたとされる「薩長同盟」の成立、明治政府誕生の契機となる「王政復古」、さらには1868(慶応4)年の「戊辰戦争」での主導的活躍、同年、勝海舟との間でまとまった「江戸無血開城」の工作にいたるまで、獅子奮迅の活躍ぶりを見せた。時の明治政府において西郷は参議職に就くこととなり、新国家建設に尽力する。しかしながら僅かな期間で「征韓論」論争において対立・抗争を生み出すこととなり、岩倉具視や大久保利通、三条実美らと激しく対立し望みが受け入れられなかったことを理由に、政治の世界から退いた(下野した)。板垣退助、江藤新平らも西郷と同じく参議を辞職し、下野している。

下野後の西郷は、士族の将来の行く末を案じ、不平不満を爆発させていた元薩摩藩士らを説得し、調停に奔走した。その甲斐もあり、鶴丸(鹿児島)城内に「私学校」を設立し、元士族の軍隊養成に尽力した。校内にはほかに「砲術学校」、「幼年学校」なども併設して

いたという。1877（明治10）年の西南戦争にて陣頭指揮を執ったが、銃弾が腕にあたり、のちに別府晋介の介錯のもと、城山にて自刃することとなった。享年50歳であった。

### Ⅲ 幼少期の西郷隆盛 — 「郷中教育」 および「日新公いろはうた」を中心に —

#### （1）郷中教育とは

西郷は、幼少期より、「郷中教育」を受けてきたといわれる<sup>1)</sup>。その教育システムはどのようなものになっていたのか。「郷中」とは、青少年を「稚児」、「二才」にわけ、勉学や武芸のほか、「山坂達者」といわれる現在でいうスポーツ、体育について、年長の者が年少の者を指導するというものである。

またその際のリーダーには、「二才頭」が就くことになり、二才と稚児の面倒を見ることになった<sup>2)</sup>。若い頃の西郷は、中国の古書を読みふけていたといわれ、そのひとつに『近思録』についても精読していた。『近思録』とは、1176年に発刊された、中国の朱子学の祖である朱熹（朱子）と呂祖謙らによって編纂された朱子学の入門書のことをさし、14章の内容からなっているものであり、第1章の「道体」（宇宙や世界のとらえ方）をはじめ、第2章「為学大要」（学び方）、第6章には「齐家之道」（家庭の在様）、第8章「治国平天下之道」（国を治め、天下を太平にする方法）、第11章「教学之道」（教育のあり方）、第14章「聖賢氣象」（先人の聖人や賢人について）にいたるまで、幅広く習得したようである。これを精力的に学ぶグループが薩摩藩内には存在し、そのグループを「精忠組」と呼んでいた。西郷も若い頃からこの輪読会に入会しており、大久保正助（のちの大久保利通）、有村俊斎（のちの海江田信義）、税所喜三左衛門（のちの税所篤）、吉井仁左衛門（のちの吉井友実）、伊地知竜右衛門（のちの伊地知正治）らも入会していた。また大山綱良（のちの鹿

児島知藩事）や奈良原繁（のちの沖縄県知事）、寺田屋騒動（1863年）で精忠組の同士に斬殺されることになった有馬新七も生前は同会に属する下級武士であった。「精忠組」はのちに輪読会から、「突出」とよばれる、革命組織に変化を遂げ、幕府改革を企図した出兵を実行に移す組織となっていった。しかし有馬が刺殺された寺田屋騒動を機に、精忠組は事実上崩壊していく運命をたどることになった。

#### （2）郷中教育の内容

郷中教育では、稚児とよばれる武士の子どもたちは、毎日朝早くから郷中内の先生の家に足しげく通い本読みを行った。また家に帰ってからは、本読みの復習をはじめ、家事を手伝うことも行っていた。朝食を終えた後も、「馬場」といわれる広場や神社の境内に集まり、馬追や降参いわせ、相撲、旗取りなどの山坂達者により、心身の鍛錬に余念がなかった。午後からは、仲間を互いに誘い合い、先輩や先生の家に集まり、読み書きの復習が行われていた。終了後は稽古場に向かい、夕方まで剣術、槍術、弓馬の術など武芸の稽古に励むことになった。かくして武士の子どもたちは、一日の多くを同年代の子どもらと年長の子もたちとともに過ごすことを通じて、心身を鍛え、躰、武芸を身につけ、勉学に励んだのである。その際には年少者を指導することや、年少者は年長者に尊敬の念をもって接し、身をもって教えた。また「うそをつくな」、「弱者をいじめるな」という、人としての生き方についても叩き込んだ。

また年長者であった二才らも、互いに戒めあい、修身の道に進みながら、自重するとともに、二才頭をリーダーにして、互いに論議し、郷中におけるすべての問題を解決していくことになった。二才らでまとめることができないときには、長老を訪ね、適宜指導を受けることになった。

1) 『2018年 大河ドラマ 西郷どん 完全読本』（産経新聞出版、2018年、145～146ページ）

2) 同上、151ページ。「二才頭」は郷中教育のリーダー的存在としてみなされた。西郷や大久保は有名であった。

すなわち、郷中教育は、集団のなかで行われた子どもたちの自治的な教育であったことがうかがえる。

### (3) 郷中教育の提唱者 島津忠良 (日新公)

「郷中」という言葉が使用されるようになり、それを中心にした教育が行われるようになったのは、戦国時代の島津家当主であった10代の島津忠良 (日新公) であった。彼は、青少年の志操教育に力を尽くしたとされる。

島津忠良は、島津氏中興の祖ともいわれ、文武を兼備した武将であった。幼少期より神道、儒教、仏教を習得し、『薩摩学』、『日学』を唱え、薩摩独自の武士文化を築いた。「日新公いろは歌」は彼が48歳ごろから55歳までの時期に制作されたといわれる。

「古の道の聞き手も唱えても我が行にせずば甲斐なし」からはじまるいろは歌は、郷中教育の規範となることになった。

忠良は毎月5、6回程、諸子子弟らを城中に集めては、四書五経の講義を行うこともよくあった。

## IV 島での生活と人間愛の醸成

### (1) 島津斉彬の死と沖永良部島への配流

島津斉彬の死去後、西郷の処遇もよろしくなくなっていた。斉彬に才能を見出されて登用された西郷にとっては、斉彬の死は、大きな後ろ盾を失ったことに匹敵した。斉彬の異母弟であった島津久光が跡を継ぐと、西郷と全くそりがあわないことが多くなり、久光の逆鱗に触れることもしばしばであった。西郷は久光の命を受け、沖永良部島に配流となった。沖永良部島はもともと薩摩藩の属領であったことから、多くの在任が島流しにあうことがよくあったようである。西郷は、島内にあった簡易牢に入牢を強いられ、劣悪な環境での生活を送ることになった。西郷の肥満の体形はみるみる痩せ細った風貌に変化した。

### (2) 島民のやさしさにふれる—“敬天愛人”思想の誕生—

西郷は、島におよそ1年7か月程度滞在することになった。そこでの滞在中に島民より多くの恩恵を受けることになった。恩恵を受けた御礼として、西郷は島の若者らに対し、聖賢の道について講義を行ったり、飢餓の時のために穀物の保存法として「社倉法」を伝授し、島民の生活の向上を図るようにも努力した。西郷は島生活においてもおよそ800冊程度の膨大な書籍を島に持ち込み、読書三昧に明け暮れた。「忠義などどうでもいい」と西郷はたびたび言葉を発したが、沖永良部島ではわずか4畳の広さの牢での生活を強いられた。しかし西郷の極貧生活に見かねた島役人の土持政照の厚意により、新設された座敷牢に住まいを移し、最低限度の人間らしい生活を送ることができるようになった。西郷はこの牢で日々読書にふけりながら、七言律詩「獄中感有り」という漢詩をしたためることになる。「主君の恩寵も人の世の浮き沈みであり、天命を信じ、それを重んじて生きることが大切」という、いわゆる「敬天愛人」の考えを身に付けるようになった<sup>3)</sup>。また島生活では、人との出会いも西郷を大きく変えることになった。書道家である川口雪蓬との出会いもその一つであった。川口は西郷に書や漢詩を教え、心の友として西郷と交流することになったといわれる。政治的失脚により、人生を絶望視していた西郷であったが、自らの人生について再考するようになる。読書に耽っていた彼は、幕府の与力であり後に大塩の乱の首謀者となった、大塩平八郎に次第に傾倒することになり、彼の著作『洗心洞答記』を精力的に読み込んだ。この大塩の著書から、陽明学すなわち革命思想を身に付けていくことにもなったといわれる。

この生活を通じて西郷は、「敬天愛人」の考えがうまれたといわれている。「天を敬い、人を愛する」というこの思想は、その後の西郷の思想の土台になるだけでなく、島の子ど

<sup>3)</sup> 西郷隆盛『南洲翁遺訓』角川学芸出版、1991年、55～56ページ。

もたちの教育にも大きな影響を与えることになった。

### (3) 島娘愛加那との出会い

西郷が“敬天愛人”という思想を土台に添えることができたのは、島娘であった愛加那との出会いが大きいといえる<sup>4)</sup>。愛加那は西郷のやさしさにふれながら、西郷を包み込むような包容力をもった女性であった。西郷は愛加那と結婚し、三人の子宝に恵まれることになるが、西郷が藩命を受け、島を離れてからも三人の子どもを育て上げ、嫁としての職務を全うした。当時の島の女性は、本土に嫁ぐことは許されない事情であったこともあり、西郷は愛加那との島生活を余儀なくされることになった。この愛加那との出会い・結婚生活により、西郷は忘れかけていた「愛」をたくさん受け入れることになった。大河ドラマ「西郷どん」第20回及び第22回放送分で、西郷と愛加那による仲睦まじい愛のある夫婦生活を描いたシーンがかいま見えるが、愛をもって人に接することで幸せになることを肌で感じたであろう。それは敬意を表する、藩主島津斉彬の死後、政治的失脚の身となり、生きる目的を見失っていた西郷が、再び「生きる」ことを教えられたのである。愛加那との出会いは、西郷の島を離れたくないという強い心を形成していった。この事情は、親友で交流の深かった大久保にも幾度も書簡で伝えている。しかし大久保は政治的手腕に長けた西郷の薩摩復帰を粘り強く願い続け、頑なに拒んでいた藩主島津久光の心を開かせることにつながった。1862（文久2）年に藩主久光から帰還命令が発令され、藩命により西郷は再び薩摩に戻るようになった。島生活での経験という大きな土産を引っ提げて彼は、恩人でもある妻の愛加那ら家族と別離を告げるようになった。別離後の西郷は、藩政改革と倒幕運動に一層、力を傾注していくことになった。そのエネルギーの備蓄をこの島生活

を通じて充電したといえよう。

### (4) 島の子どもらに「日新公いろは歌」を伝授

島生活で忘れてはならないことがある。それは西郷は島の将来を支えていくことになる子どもたちの教育についてである。大河ドラマ「西郷どん」の第25回放送分では、「楼の上も はにふの小屋も住む人の 心にこそは 高いやしき」という句を西郷自身が詠み、その後が続く形で、島の子ども等が詠むというシーンがある。この句の意味としては、「立派な御殿に住んでいようと粗末な小屋に住んでいようと、それで人間の価値は決まることではない。心の在り方によって人間の真価が決まる」というものである<sup>5)</sup>。島の子どもたちの家柄はさまざまであり、牢屋で講義をした西郷から見れば、身分差別の社会の縮図であったようにうかがえたのであろう。西郷に教えを乞うたすべての子どもらを座敷に挙げ、平等に講義をしたのであった。身分や境遇などの差別のない「四民平等」思想をすでに西郷が培っていたことがうかがえよう。西郷は薩摩藩内での郷中教育で育った精忠組の仲間の大山格之進（のちの鹿児島県令になる大山格良）、大久保一蔵（のちの新政府を支える重鎮の一人になる大久保利通）、有坂俊斎（のちの海江田信義）、村田新八等とともに、がむしゃらに学んでいたことを回顧して思い出していたのかもしれない。「日新公いろは歌」は全部で47首存在するが、道德教育の内容となるものが多い。ここでいくつかを紹介しておきたい<sup>6)</sup>。

㊦「似たるこそ友としよけれ交らば 我に  
ます人 おとなしきひと」

（人は自分と似たと友達になるが、それ  
だけでは進歩しない。自分より優れた人  
を友として自己研鑽しなさい）

4) 「愛加那」は、奄美大島の有力者龍佐民の娘であり、西郷との間には二子をもうけている。長男の菊次郎は第2代京都市長に就任した人物として知られている。愛加那は1902年8月に66歳

の生涯を閉じている。前掲1)

5) 『2018年大河ドラマ 西郷どん 後編』(NHK出版、2018年、78～79ページ)

6) 同上、120～122ページ。

- ① 「善きあしき人の上に身を磨け 友はか  
がみとなるものぞかし」  
(自分の行動の善悪を知ることは難し  
い。しかし他人の行動の善悪は目につ  
く。友人を見てよいことは見習い、悪  
いことは反面教師としなさい)
- ② 苦しくも直進を行け九曲折の 未は鞍  
馬のさかさまの世ぞ (苦しくても、た  
だまっすぐ正しい道を進みなさい。曲  
がった道を行ったものは、必ず闇の世  
界に落ちる)

子どもたちは歌にして覚えることで、大人  
になっても忘れないという効果があったので  
あろう。内容も子どもたちにはわかりやすい、  
普段の生活上にあてはまるが多い。

薩摩藩では、これがかかるたとして子どもた  
ちの生活文化に溶け込んでいくことになっ  
た。

## V 西郷の考えるリーダーとしての条件

### (1)『南洲翁遺訓』にみる西郷のリーダー(統 率者)思想

西郷は離島して鹿児島に帰郷をはたした。  
帰郷後の彼は「倒幕」をスローガンに江戸幕  
府を滅亡させ、新しい時代を築こうと奔走す  
ることになる。彼の中心思想にあったのは、  
新しい世の中に登場すべきリーダーの育成で  
あった。当時の彼の考えや思想を理解でき  
るものに、『南洲翁遺訓』という言行録が存在  
する。『南洲翁遺訓』は、1890(明治23)年  
に庄内藩の藩士等の手により刊行された。明  
治維新時に薩摩屋敷の焼き討ちを行った庄内  
藩に対し、戊辰戦争後、西郷は彼らに温情を  
もって接したと伝えられている。西郷の行為  
に感服した庄内藩士らは鹿児島で職を退いた  
西郷を訪問し、教を乞うことになった。こ  
のときの教訓を本としてまとめたものであ  
る。この教訓集から彼がリーダーとはいかな  
るものであるか、について発した言辭が残さ  
れている。以下に紹介しておきたい。ただし、

( ) には現代語訳を付しておいたこと  
をことわっておきたい<sup>7)</sup>。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相  
手にして、己を尽くして人を咎めず 我が  
誠の足らざるを尋ぬべし

(人を相手にするのではなく、天を相手にす  
るよう心掛けなさい。天を相手にし、自分を  
尽くし、人を咎めるのではなく、自分の誠意  
の足りないことを大いに反省しなさい)

作略は平日致さぬものぞ。作略を以てやり  
たる事は、その迹を見れば善からざること  
判然にして、必ずしたりこれある也

(はかりごとは、常日頃からしてはいけない。  
はかりごとでなしえたことは、あとから見れ  
ばよくないことが明らかであり、かならず後  
悔するものである)

己を愛するは善からぬことの第一也

(自分自身を愛するのは、いちばんよくない  
ことである)

西郷の人物像がうかがい知れる珠玉の名言  
である。

## VI 「学習指導要領」における道徳の項目と 西郷の道徳思想

道徳の教科化が、2018(平成30)年4月1日  
より小学校で、2019(平成31)年4月1日より  
中学校で実施されることが予定されている。  
「特別の教科 道徳」の内容項目には、中学  
校では22存在する。

「A 主として自分自身に関すること」とし  
ては、「自主、自律、自由と責任」、「節度、節制」、  
「向上心、個性の伸長」、「基部と勇気、克己と  
強い意志」、「真理の追究、創造」がある。  
つぎに「B 主として人と関わりに関するこ  
と」については、「思いやり、感謝」、「礼儀」、「友

<sup>7)</sup> 前掲3)、70～74、81、85ページ。

情、信頼」、「相互理解、寛容」の4つが存在する。

さらに「C 主として集団や社会とのかかわりに関すること」については、「遵法精神、公德心」、「公正、公平、社会正義」、「社会参画、公共の精神」、「勤労」、「家族愛、家庭生活の充実」、「より良い学校生活、集団生活の充実」、「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」、「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」、「国際理解、国際貢献」がある。

最後の「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」では「生命の尊さ」、「自然愛護」、「感動、畏敬の念」、「よりよく生きる喜び」がそれぞれの項目に挙げられている。

中学校の道徳の項目から西郷が後世に残した言葉等を見てみると、その多くが該当していることに気づく。

「A」の項目のうち「克己」についてみてみると、「己れに克つに、事事物物時に臨み手、克つ様にては克ち得られぬなり。兼ねて気象を以て克ち居るれよと也」という言葉がある。いざ、事件や物事を目の前にすると、自分の弱さや欲望に打ち勝とうとしていても、簡単にできることはない。だから日常から意志を強くするように心がけ、自分に克つ修行をする必要があるという。

さらに西郷の言葉を紹介したい。「命もいらず 名もいらず、簡易も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難をともにして国家の大業は成し得られぬなり」と述べている<sup>8)</sup>。すなわち、生命も名誉も地位も大金においても、いらぬという無欲の者は、周囲の人々が扱いにこまることがあるかもしれない。でもそういう人物こそ、苦難もともにして国家の大きな仕事を成し遂げることができないであろう、という意味の言辭である。

すなわち西郷は損得で動かない人物は処遇に扱いづらいものの、「誠」、「仁」、「義」といった言葉で人を動かすことができるという。こ

の言葉を彼は中国の古典であった『孟子』から引用した。

また「C」の「公平」について、西郷は興味深い発言をしている。それは「西郷どん」第1回の放送の発言である。「女子はつまらん。女子は孫じゃ。郷中に入れてもらえんで、学問も剣術も習えん。同じ人間じゃつとに、おかしなあ・・・」というものである<sup>9)</sup>。すでに幕末の時期に「男女平等」の考えを西郷が抱いていたことがうかがえる一説である。「女子は道の端を歩け」と荒くれ者に怒鳴られた様子を見た彼はこの言葉を聞き、考え込んだという。また第2回放送では、西郷が次のように発言している。「薩摩ん民様ん大切な子どもでございもす。われらはそん民百姓を大切に守らにゃんないもはん。おいは、そいが明の上に立つもんの忠義じゃち思ちよいもす」である<sup>10)</sup>。当時の薩摩藩の財政再建を託された調所広郷に対し、西郷は農民にも思いやりの心をもって公正な判断のもとで政治を行う必要性を訴えた。

## Ⅶ おわりに—西郷隆盛と道徳教育—

西郷隆盛の人物像と道徳観について大河ドラマ「西郷どん」の関連シーンを取り入れながら、考察・検討を行った。わが国の道徳教育は、現在行われている道徳の時間のみならず、あらゆる科目や行事などを通じて行われなければならないと『学習指導要領』で記載されている。西郷隆盛という人物をこのたび本稿で取り上げたが、西郷は、紆余曲折の人生の中で、逆境を生き抜いてきた「偉人」であった。厳しい郷中教育における躰を身に付け、仲間を思い、仲間を大切にする優しさを備え、時には犠牲を顧みない行動をとるような、不器用な性格の一面も見える。1877（明治10）年の西南戦争において、薩摩の不平士族を率いながらも、当時の明治新政府に対決を挑む、ある意味無謀な行動により、自ら自害に追い込まれた彼は、人との絆を大切にしたい愚直な性格の一面も持ち合わせていた。

<sup>8)</sup> 前掲3)、70～74、81、85ページ。

<sup>9)</sup> 『NHK大河ドラマ 西郷どん 前編』(NHK出版、

2018年、84～85ページ)

<sup>10)</sup> 同上、87～78ページ。

また斉彬の死後における政治的失脚や島生活を強制などの逆境においても、それを跳ね返すだけの力を持ち、再度人生の表舞台に登場することになった。まさしく人生のなかで「生きる力」を育むことに成功した偉人の一人であった。だからこそ、彼の人物像は道德教育の教材としてふさわしいものであり、西郷の考えがどういうものであり、なぜそのような行動をすることになったのか、について、しっかり授業を通じて、児童や生徒が主体的ならびに対話的に考えていくことが大切になるのである。

次年度からは中学校においても道德の教科化が実現することになる。今後も道德教育として偉人がいかに使われていくべきかについて考える機会にしたい。

#### <参考文献>

1. 安藤優一郎『西郷隆盛の明治』歴史新書、2017年。
2. 磯田道史『素顔の西郷隆盛』新潮新書、2018年3月。
3. 一坂太郎『これだけは知っておきたい幕末・維新』朝日新聞出版、2012年。
4. 井上清『西郷隆盛』中央公論社、1970年。
5. 猪瀬直樹・磯田道史『明治維新で変わらなかった日本の核心』PHP新書、2017年。
6. 小川原正道『西南戦争—西郷隆盛と日本最後の内戦—』中公新書、2007年。
7. 『大西郷遺訓』中央公論新社、2017年。
8. 加来耕三『「南洲翁遺訓」に訊く 西郷隆盛のことば』(河出書房新社、2017年)
9. 川道麟太郎『西郷隆盛—手紙で読むその実像—』ちくま書房、2017年。
10. 西郷隆盛『西郷隆盛全集』(第6巻)、大和書房、1980年。
11. 西郷隆盛『南洲翁遺訓』角川学芸出版、1991年。
12. 坂野潤治『西郷隆盛と明治維新』講談社現代新書、2013年。
13. 幕末維新・歴史研究会編『真説 西郷隆盛の生涯』宝島社、2017年。
14. 『2018年大河ドラマ 西郷どん 完全読本』(産経新聞出版、2018年)。
15. 『2018年大河ドラマ 西郷どん 前編』(NHK出版、2018年)。
16. 『2018年大河ドラマ 西郷どん 後編』(NHK出版、2018年)。
17. 松浦玲『勝海舟と西郷隆盛』岩波新書、2011年。
18. 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道德編平成29年7月』教育出版、2018年。
19. 文部科学省『中学校学習指導要領』教育出版、2018年。
20. 山田済斎『西郷南洲遺訓一付・手抄言志録及遺文一』岩波文庫、1991年。



【写真1】西郷隆盛肖像画(尚古集成館所蔵)





【写真2】NHK大河ドラマ「西郷どん」ポスターより  
<https://taigatv.net/2018/18kanren/story-background>



【写真3】島での子どもへの教育の様子  
(日新公いろは歌) <https://taigatv.com>

